

常識哲学者としてのバークリとリード

戸 田 剛 文

カントがリードを批判するときに、『プロレゴメナ』の中で、常識を頼りとすることが哲学者にとつてはすべきことだと述べたことはよく知られている。しかし、しばしば、常識とは、特に英米の哲学において重要な役割を果たしていると主張されてきた。例えばティモシー・スプリッジは、次のように述べている。

少なくともバークリの時代より、常識に対する哲学者の態度は、その哲学的な人格 (philosophic persona) の重要な要素であった。少なくともこのことは、英米系の哲学者については正しいと言えることである (一)。

確かに、バークリが常識を味方につけようとしたことはよく知られているが、バークリが実際に常識を擁護できているのかということについては大きな議論がある。本論文で私は、

バークリと常識哲学の代表的な哲学者であるリードの議論を対比させながら、常識を擁護するということがどのようなものであるのかを考察していきたい。ここでの考察は、常識哲学というものが、どのようなものであるべきなのかについての私の考えを示している。議論の進め方としては、まず簡単にバークリの議論を確認し、その後、リードの第一原理についての議論を批判的に検討する。また本論文の大部分はこの考察に当てられる。そして、これらの議論をもとに、常識と哲学の関係について述べることにしたい。

1. バークリと常識

スプリッジの言葉にあるように、確かにバークリは、その著書の中で自らの立場が常識的なものであることを強調する。例えば『ハイラスとフィロナスの三つの対話』の中で、形而上学にそむき、自然と常識の平明な指図に従ったときに、多

くのが明らかに became フィロソフに述べさせている (D12)。また、フィロソフは、ハイラスとの議論の中で、頻繁に意見の正しさの基準を、常識との一致であると主張している。しかし、実際には、バークリは、たんに常識的な考えをそのまま正しいものとして述べているわけではない。それは、『対話』におけるフィロソフの次の言葉がはっきりと示している。

私は、新しい思念の創始者だなんて言いませんよ。以前は一般人と哲学者の間で共有されていた真理を統一して、明るい光の下に置こうと努力しているだけなのです。そして、一般人の意見はね、直接に知覚される物が、実在物だ・というもので、哲学者の意見はね、直接に知覚される物が、心の中の観念だ・ということなのです。その二つの思念が一緒になって、結果的に私が主張しているものになるのです。(D82)

このように、バークリはたんなる常識擁護を展開したわけではなく、常識的な考えと哲学的な考えの調停を図ったのだと言える。実際に、バークリは、第一対話において、彼が哲学者の意見だ・という考え、つまり「直接に知覚される物が心の中の観念だ」ということを示すために、知覚の相対性などを用いて、さまざまに説明しているが、それは、彼が受け入れている哲学的な考えの正しさを示す必要性があったからなのである。その結果として導かれるのは、上の引用文で述べ

られている二つの主張を合わせたもの、つまり、「直接に知覚されるものは観念であり、かつ実在物である」という主張となる。

そしてこの主張がたんなる常識的なものではない以上、バークリは、直接に知覚されるものが実在物であるという常識的な主張は維持しつつも、その実在物であるということがどういふことかというのを、哲学的にとらえ直したということが出来る。この点についての彼の議論は、のちにエアなどの論理実証主義者にも高く評価されるものとなる。

2. トマス・リードの場合

スコットランド常識学派の中心的な哲学者であるリードは、彼自身が告白するように、もともとバークリの考えを受け入れていた哲学者であり——ジョージ・タインブルの影響が指摘されている——、その常識を重視する考え方も、バークリの影響が少なからずあると考えられている。

リードは、バークリが人間の常識と彼の理論を調停させようとしたことを十分に理解しているが、バークリはうまくやれていないと考えている。では、リード自身の常識とはどのようなものだろうか。バークリは、常識がどういふものかという点については十分に説明を与えていない。しかし、リードは、常識がどのようなものかということについて、一節をさいて説明している。まずその点を見てみることにしよう。

リードは、常識 (common sense) という言葉の中に現れる感覚 (sense) が一種の判断力であることを繰り返し述べる。

そして常識と理性について次のようにいう。

理性と常識のあいだに何か対立があると考ええることは不合理である。実際に、常識は理性の第一子であり、それらが、会話や書き物において一緒になるように、その本性において分離できないのである。

われわれは理性に二つの役割あるいは二つの段階を帰することができ。第一のものは、自明な物事を判断することであり、第二は、自明な物事からそうではない結論を導くことである。これらのうちの第一のものが常識の領域であり唯一の領域でもある。それゆえ、常識はその全範囲で理性と一致し、理性の一部門あるいは一つの段階の別名ではない。(EP, 432-433)

つまり、リードによれば、常識とは自明な物事を判断する能力のことである。リードの常識は、彼の認識論的な体系の中で非常に大きな役割を果たしている。次の言葉を見てみよう。

それゆえ、すべての推論とすべての学問の基礎となる共通原理がある。そのような共通原理は、ほとんど直接の証明を受け入れないし、また必要ともしていない。人は、それを教えられる必要もない。というのも、それらは、普通の理解力のあるすべての人々が知っているようなものだからだ。あるいは、少なくとも、それらが提示されたり、理解されたりするとすぐに彼らが容易に同意を与

えるようなものだからである。

われわれが学問でそのような共通原理を使う機会があるときには、それは公理と呼ばれる。(EP: 39)

何か個別の領域のものではなく、「すべての学問の基礎となる共通原理」があるとリードは主張している。すべての学問の基礎となる、ということは、ある意味で無条件的なものであり、コンテキストに依存していないということになる。そしてそういった原理は、まさしく自明のものであり、自明であることを判断するのが、常識なのである。それゆえ第一原理は、常識の原理とも言われる。

先ほどの種類の命題は、学問の問題において用いられるとき、公理と呼ばれてきた。そしてそれらが用いられるあらゆる機会で、それらは第一原理、常識の原理、共通思念、自明の真理などと呼ばれてきた。(EP: 452)

つまり、われわれのものの考えには、第一原理となるものがあり、それらは自明であり、そして常識によつて第一原理として判断されるのである。このように書くとき、リードにとって常識とは、われわれのものの考え方の限界——ウィトゲンシュタインの言葉を用いるならば世界像——のようなものを判断する極めて強い心の働きであるように思われる。リード自身は、そのような第一原理として必然的なものと偶然的なものという分類のもと、多くの原理をあげるが、その原理がど

れほど正しいものであると言えるのかは問題となる。

今までの引用を見てもわかるように、リードは常識が自明なものを判断し、そして第一原理は常識の原理だと述べており、第一原理は基本的に自明なものでなければならぬ。それにもかかわらず、第一原理が、歴史的に見て大きく哲学者によって食い違ってきたことを指摘している。

第一原理について、哲学者の中かなり大きな意見の相違があるようである。ある人が自明だと考えているものを、別の人は論証によって証明しようとし、また別の人は、それを完全に否定するのである。(EIP: 453)

そして、「概して、私は、自分たちが慎重であるべきであり、第一原理としての地位の資格がない意見を、第一原理として採用しないようにしなければならないことを認める」と述べているのだが、この言葉は、リード自身でさえも、第一原理ではないものを第一原理として提示してしまう可能性があることを認めているとも考えることができるのである。

リードは、現代で言う可謬主義的な知識観を提示した哲学者である。そのことを端的に表した次のような言葉がある。

人やあらゆる被造物が誤りうるものであるということ、そして誤りうる存在者は、誤りえない存在者が持つ真理についての完全な把握と確信を持つことができないということ、私はこれらが当然のものだと認められなければならない

ならないと考える。それは、誤りうる存在者を謙虚なものとし、新しい光に開かれ、何らかの間違った偏見あるいは性急な判断によって、彼が誤って導かれるかもしれないということを認識させるのである。もしもこれがある程度の懷疑主義と呼ばれるのなら、私はそれを肯定しないわけにはいかない。(EIP: 563)

さらにすぐ後に次のように述べている。

それから、次のことが認められなければならない。それは、人間の判断は、いつも、判断におけるわれわれの可謬性についての謙虚な感覚を伴いつつ作られなければならないということである。(EIP: 564)

ここにおいて、われわれはリードの議論に、いささか異なる方向の主張が見出されることがわかるだろう。一つには、常識の指図によって判断される原理の自明性、権威といったものへの方向性、もう一つは、われわれが可謬的であるという方向性である。この二つを整合的に捉えようとするならば、リードの自明性は、一種の心理的な捉え方であると考えざるを得ないように思われる。ある命題や判断が自明であるというのは、それ自体が不可謬なものではなく、自明に思えるということではないということになる。確かにそう考えると、常識が指図するところの第一原理が、哲学者によって異なるという主張と整合的である。多くの哲学者は——リ

ドも含めて——第一原理を、それが事実・自明なものであることによつて第一原理だと定めているのではなく、たんに彼らが自明だと思ったが故に第一原理だと述べているのである。しかし、それでもリードは、第一原理への強い権威を認めている。

学者が数学の論証において有能な裁定者であるように、常識の問題において、あらゆる人は有能な裁定者である。そして、そのような問題において、人類の判断は、神が彼らに与えた能力の自然な結果であると大いに確信できる。そのような判断は、誤りと同じぐらい一般的である。誤りの原因があるときだけ、間違つたものとなる。これが、誤りの原因があることが示されたとき、私は、それがその適切な重みを持つべきだと認める。しかし、どのような原因も割り当てられないとき、自明な事物において人類が一般的に真理から逸脱していると想定することは、かなり不合理なことなのである。(EP. 406)

そして、常識の問題においては多数の意見の方が重視されるべきだと述べる。

通常の知性の手が届かない範囲にある問題において、多くの人々が、少数の人々によつて導かれ、喜んでその権威に屈している。しかし、地域的で一時的な偏見が取り除かれたとき、常識の問題において、少数者は多数者に

屈しなければならない。今や、どのような人もゼノンの運動を否定する難解な論証にどのように反論すればいいのかわからないかもしれないが、それに心を動かされたりはしない。(EP. 401)

直前の箇所で、リードは、権威への慎重な態度を示しているが、基本的な論調としては、一般的な常識的判断を正しいものだと認めるべきだと言うのがリードの主張である。

リードの立場に対して、問題点だと思われるものをまず指摘しておく。リードは、常識に十分な権威を与えようとしている点で、確かに、のちの哲学者から常識学派の名前を与えられるにふさわしい主張をしていると考えられるが、歴史的に見れば、常識的な判断が、常に改定されてきたことは事実であろう。例えば、太陽が地球の周りを回っているわけではないという考えは、リードの時代においてすでに科学によつて改定されている考えである。リード自身、われわれの常識的な考えが科学によつて改定されてきたことを述べている箇所がある。

リードは、第一原理を偶然的なものとの必然的なものにわけ、それぞれいくつかの原理を列挙する。例えば、偶然的な第一原理の五番目に、「われわれが感官によつて判明に知覚するものは実際に存在し、われわれがそのようなものだ」と知

覚するようなものだということだ」というものをあげる⁽²⁾。しかし、われわれは明晰かつ判明な知覚においても誤る——明晰・判明な夢や錯覚・幻覚の場合など——ことは十分にありうることであり、確かに、知覚の明晰判明さによつて夢と現実を区別することはしばしば彼以前の哲学者によつてなされたこととしても、そのまま受け取るわけにはいかないだろう。

ここでもう一つの第一原理を取り上げよう。それは偶然的な第一原理の中の七番目の第一原理であり、次のようなものである。

もう一つの第一原理は、われわれが真理を誤りから区別する本性的機能は、当てにならないものではないということである。(EIP. 470)

この第一原理は、リードのあげる第一原理の中で、最も研究者の注目を受けてきたものである。それは、リードの次のような言葉による。

もしも、何らかの真理が、自然の順序において、すべての他のものに先行すると言われるのならば、これ「われわれの機能が信頼できるものであること」は、最良の要求を持っているように思える。なぜなら、同意のあらゆる事例において、直観的あるいは論証的、あるいは蓋然的な証拠にもとづいていようとなかろうと、われわれの機能の正しさは、当然のものとみなされていて、いわば、われわれの同

意に基づく前提の一つだからである。(EIP. 481)

この言葉を見ると、この第一原理は、他の第一原理、特に意識・知覚・記憶（それぞれ一番目、三番目、五番目に第一原理としてあげられている）などについてのべた第一原理に対して特別な地位にあるように読むことができる。現代での主たる解釈としては次のようなものがある。(一)意識・記憶・知覚などの対象について述べた第一原理が個別の機能の信頼性について述べたものであるのに対して、この七番目の第一原理は確かに特別なものであり、われわれの能力一般の信頼性を述べたものであるとする解釈。(二)この第一原理は、実際には特別なものではなく、他の第一原理で述べられている意識や記憶や知覚などと同じように、理性や判断能力の信頼性について述べたものだとする解釈、(三)また意識・知覚・記憶について述べている第一原理は、実際には能力のことを述べているものではなく、能力の対象が存在すること、つまり、形而上学あるいは存在論的なものであるのに対して、この七番目の第一原理だけが、認識論的なものであり、それゆえ特別なものであるとする立場などがある⁽³⁾。

特に、第一の解釈や第二の解釈は、われわれの能力の持つ信頼性に言及しているものとしてリードの言葉を理解している。つまり、われわれの能力が、個別的なものであろうと一般的なものであろうと、われわれの知的能力が信頼に足るものであることを前提とするものと理解している。しかし、第三の立場をとるリシューの見解はこのような見方とは大きく

異なっている。リシェーの主張は、十分に説得力のあるものだが、しかし意識・記憶・知覚などについてのべた第一原理を、そのそれぞれの能力の信頼性を主張するものとして捉える可能性も十分にあるのではないかと私は考えている(4)。その点について以下で述べよう。

意識・記憶・知覚などについての述べた第一原理が、これらの働きが信頼できるものであることを述べたものであるとする。たとえそうだとしても、信頼できるものであるということは、必ずこれらの働きが絶対に正しいと言うことを保証するわけではない。そしてもちろんリードもそのことは十分に理解している。そしてリード自身、確実性というものが知識に必要であるとは考えていないようである。

つまり、意識・記憶・知覚などについて第一原理は、次のような言葉をつけて言い直したとしても、それはリードが否定するようなものではないだろう。

(P) 意識・記憶・知覚などの能力は、基本的に信頼されるべきものである。しかし、ときどきわれわれを誤りに導くことがある。

ここで、リードのいう第一原理といささか隔たりができるように思えるだろうが、さらに次のような言葉を付け加えてみよう。

(P') 意識・記憶・知覚などの能力は、基本的に信頼される

べきものである。しかし、ときどきわれわれを誤りに導く。だが、個々の場面において、それに用心する必要はない。

これとは逆の方向性も当然ありうる。

(P'') 意識・記憶・知覚などの能力は、基本的に信頼されるべきもの出る。しかし、ときどき我々を誤りに導く。だから、われわれは個々の場面において、それに用心するべきである。

「用心する」と書いたが、これは控えめな表現であり、「時には疑う必要がある」と書き換えても良い。このように変形すると、(P') と (P'') のどちらをリードが支持するかについては明確なことは言えない。しかし、(P'') が支持される可能性も十分にあるように思われる。そしてそうだとするならば、ここで七番目の第一原理が重要な役割を果たすことになる。

七番目の第一原理が述べていることは、何かわれわれの個々の能力を疑うことがあることを認めたとしても、すべての能力を同時に疑うことはできないということを述べていると考えることができる。例えば、われわれは時として自分の知覚能力を疑うことがあるかもしれない。そしてそのときの知覚的判断を疑い、それを吟味するとき、われわれは別の能力を使ってそれを行っている。つまり、ある知覚判断の正しさを吟味したり判断したりするその能力は、正しいものだということを前提せざるを得ない。ある能力が生み出す判断が正

しいかどうかを吟味したり判断したりする能力は、必ずしもその能力とは異なる能力である必要はないかもしれない。ある知覚判断を、別の知覚判断によって吟味したり判断したりするかもしれない。

このようにリードの第一原理についての主張を理解するならば、確かに七番目の第一原理は特別な地位にあると言える。というのも、他の能力についての第一原理は、それぞれの能力が別の能力によって吟味され、またその能力によって生み出される判断はときに誤りうるものであるのに対して、七番目の第一原理は、その一般性がゆえに、そこから生み出される判断が誤りとなる可能性がなく、またこの第一原理の吟味に他の能力を必要としない。もしも、この第一原理が誤りであることを示そうとするならば、そのとき、われわれは何らかの真偽の判断を行う能力を使わなければならず、その際、その能力を正しいものだと考えなければならぬ。キース・レーラーは、この第一原理を、このような性質によって循環原理 (looping principle) と呼んでいる。そういった循環を避けたいならば、それこそ古代の懐疑主義者のように、判断を停止するしかない。そしてリードは、そのような懐疑主義者には、好きにさせるしかないと述べている。

確かに、今述べたような点を考えてみても、七番目の第一原理は (判断停止を除いては) 正しいと考えざるを得ないものであり、ある意味で特別な地位をもっていることは認められて良いと思う。ただし、これまでの私の説明が正しいとするならば、哲学的議論としてこの第一原理が威力を発揮する

場面は、かなり限定的なものとなるように思われる。つまり、この第一原理は、デカルトのように、あらゆるものを疑うというような全面的な懐疑を行おうとする立場に対してのみ威力を発揮するもののように思われるのである。実際に、この七番目の第一原理について述べる箇所は、特にデカルトに対して向けられている。

リードの第一原理が——七番目の第一原理を除いて——訂正の可能性があるとすれば、われわれはそこからどのような考察を引き出すことができるだろうか。レーラーは、リードの認識論について興味深い言及を行なっている。それは、リードの認識論は、第一原理を定めることによって基礎付け主義的な要素と持つと同時に、整合説的な要素ももちうるというものである。

推論の結果として明白なものもあれば、明白ではあるが推論の結果としてではないものもある。これは基礎付け主義の正しさである。一方、第一原理は、鎖における結び目のように結びつきあい、おたがいに確証しあい、その結びつき合う仕方によって明白なものとなる。これは整合説の正しさである。(Lehner, 1990, p. 43)

レーラーのこの言葉は、リードの認識論の枠組みの極めて重要な点について私には思われる。しかし、同時に、リードは明らかに認識論を一種の基礎づけの主義的な仕方方で構築しようとしているように思われるが、彼がいったん

可謬主義的な知識観を導入したならば、この基礎づけ主義的な側面はむしろもっと弱めるべきではなかったかと思う。その点をもう少し詳しく述べることにしよう。

レーラーは、第一原理が、それらの内部で鎖のように結びついていると述べているが、はたして本当に第一原理どうしだけで、その整合性を保てるだろうか。例えば、再び知覚について述べた第一原理を取り上げるならば、それは「われわれが感官によって判明に知覚するものは実際に存在し、われわれがそのようなものと知覚するようなものだということだ」というものであった。問題は、この第一原理の前半ではなく、後半部分である。知覚の対象が、「われわれがそのようなものと知覚するようなものだ」というこの言葉は、少なくとも当時においても科学的な立場とは異なるうえに、少なくとも多くの哲学者（あるいは科学者）によって疑問視されている考え方である。これらは、必ずしもリードがあげるような常識的な原理から導かれたものではないようなものから導かれた考えであり、そういった科学的な考えが、ときとしてリードがあげるような第一原理の修正を促すことはありうる。（ただし、このように書くと、粒子仮説的な科学観が正しいということを認めているように思うかもしれないが、ここでリードとそういった科学観のどちらが正しいかということは考察の対象ではない。）

ただ、今私が述べたことは、必ずしもリードを全面的に批判しているわけではない。というのも、リードの第一原理が、しばしば科学的な理論によって修正されることがあるとして

も、これは単純に常識対科学というような構図で捉えるべきものではないからである。というのも、科学的なものの考えが、常識あるいは常識的な直感的判断から生じうることは否定されていないからである。

どういふことかといえば、われわれの信念体系が、リードが第一原理として考えているような世界の捉え方から出発するということを認めてみよう。しかし、そうだとすると、われわれの知識の出発点は、いつもそのわずかな数のまま正當化のための原理となるわけではない。われわれは、何世代も歴史を積み重ねる上で、そこから膨大な諸信念を作り上げていき、その全体として整合性を保とうとする。そしてそのときに、何かある考えや理論などが、正當化の要求にさらされるととき、もはやリードがあげたようなスタート地点としての第一原理だけが（リードがあげた第一原理がそのスタートとして適切なものだとして）、正當化する側の立場にあるわけではない。正當化される考え方、そしてその周辺部以外のあらゆる考えが、正當化する方に回る。つまり、信念体系がどのようなところから出てくるのかということ、何によってわれわれはさまざまな理論の正しさを追求するのかということとは、必ずしも同じものではなく、リードはこれを混同しているように見える。

ここで二〇世紀の哲学者ポパーに少し言及することにしよ

う。以前から、私は、ポパーとリードや近代の哲学者の比較を行ってきた。そういったところでも言及してきたことだが、ポパーは、リードを高く評価している哲学者の一人である。ポパーは、常識への敬意と実在論への固執という点でリードと立場を共有していると言えよう (Popper, 1972, p. 36)。ただしポパーの常識への敬意は、常識を全面的に受け入れると言うようなものではない。多くの科学理論が常識から生じたという点において常識に対して敬意を払うのであって、ポパーにとって訂正不可能な知識というものは基本的にはない。ポパーは、『推測と反駁』の序章である「知識と無知の源泉」の中で、デカルトのような合理主義者、ベーコンのような経験主義者に対して、共通する問題点を指摘している。そしてそこで言及されているわけではないが、リードにも同じような指摘が当てはまるように思われる。

ポパーの指摘は次の一点にまとめることができる。一つは、デカルトのような合理主義者もベーコンのような経験主義者も、知識が自らを開示するという楽観的な信念を背景に持っているということであり、二つめは、両者ともに、一方は知識の起源を探し求めることによってそこに権威を与えようとしているということである。

ポパー自身の立場からすれば、まず知識が自らを開示するというのではない。われわれは真理に直面すれば知識を得られるという考えは間違っており、そしてわれわれ人間が誤りうる存在である以上、どのような起源もそのような権威をもたないということである。

リードの認識論の中にも、ポパーが批判するこの両方の要素があるように思われる。まず第一原理は自明であるという主張がそうだと見える。すでに指摘したように、この自明性を、リードが第一原理それ自体がもつ自明性と捉えていたのか、あるいはたんなる主観的で心理的な自明性（つまり自明に思えるということ）として考えていたのかという問題はあがあるが、リードは、すくなくともたんなる主観的なものという扱いはしていない。その主観的な自明性が、ある意味で、原理それ自体の自明性から生じているように見える。そして二つ目について言えば、リードは、常識の原理としての第一原理が、われわれの知識の根源であり、そしてそれによって権威を与えられるものだと考えている。ポパーは、デカルトやベーコンが、直観によって真理を把握するという考えを持っていたとして批判しているが、そこにリードが加えられても違和感はないように思われる。リードもまた、常識という判断力によって、自明な命題の正しさを直観するのである。

まとめると、リードが、われわれの知識の起源として常識というものの重要性を強調した点は、十分に説得力がある（ただし彼が挙げた第一原理が、そういった起源として正しいものであるのかという点は本論文では検討しない）。しかし、それらが常にわれわれの知識の根拠となる第一原理としての地位を持ち続けるという発想は疑わしい。むしろ「第一原理」というものがあるという発想、あるいはユーゲリットのような数学的な体系を、われわれの全知識の体系のモデル

としようとするという発想は、放棄されるべきものだったかもしれない。特に、知識というものの可謬性をかなりはつきりとした仕方で導入したリードにとってはそのように思われる。リードは、可謬主義的な基礎付け主義者として考えられる哲学者であるが、可謬主義は、基礎付け主義という構造と非常に折り合いが悪者のように思われる。

3. ジェイムズ

ここで、リードとは異なる仕方での「常識」の扱いを見てみることにしよう。アメリカの古典的プラグマティズムを代表する哲学者であるジェイムズは、その名著『プラグマティズム』の中で、常識について言及している。

物事についてのわれわれの根本的な考え方は、遠い祖先が発見したものであり、後続する時代の経験を通じて保存されることのできたものである。それらは、人間精神の発展における大いなる均衡の一段階を、つまり常識の段階を形作っている。(James, 2019, p. 63.)

ジェイムズにとって、常識とは、われわれに先立つ人々が「発見し」、「保存」されてきたもののなのである。さらに「常識は、われわれが事物を理解するにあたっての十分に確実な段階」に思えるとも述べる。ついにながら、こういった「常識が絶対的に真理であること」につけて疑いを差し挟んだことがあるという者は、詭弁の才に長けた人たち、パークリのい

わゆる学問ずれのした人たちばかり」なのだ述べている。

ここまで見てみると、ジェイムズにとって常識は、時代とともに発見されてきた確実な真理と述べているように思える。しかし、実際に彼が常識について述べていることはそうではない。ジェイムズは、続いて、常識がこのように行き渡った過程は、「デモクリトスやパークリやダーウインに帰せられるべき諸概念が勝利を得るに至ったその過程と全く同じようなものであった」とのべている。常識とは、科学や批判哲学に対して（そしてそのいずれもが）絶対的により真であるというものではなく、国語を味方につけたがために「より安定した段階」でしかないのである⁵⁾。そして次のように常識に対しての疑いを読者に投げかける。

常識に疑いを挟むべき理由のあることはすでに見てきたところである。つまり、常識の範疇は大いに尊敬すべきものであり、また一般に広く用いられて国語の構造そのものの中にまで織り込まれているほどであるにも関わらず、その範疇は結局は我々の祖先が太古の時代からこれを用いて直接経験の非連続性を統一し整序したもの……自然の表面と均衡を保つことのできた極めて幸運な諸仮説の集合でしかあり得ないという疑いである。

ジェイムズは、知識の体系を動的なものとして捉え、その中の一部に——その中の安定した部分に——常識というものを位置づけている。ここでは常識とは何か原理的なものでは

ない。むしろ保存されてきた結果なのである。

このようなジェイムズの常識に対する考えは、リードの常識に対する考え方と、必ずしも相反するものではない。前哲学的あるいは前科学的には、常識がわれわれの知識の起源となることはここで否定されているわけではない。ただし、常に常識が知識の出発点として一種の固定的なものとしては述べられていない。私は、リードのように、可謬主義的な哲学を論じる立場においては、ここでジェイムズが述べているような常に新しい考えを取り込みつつ発展するものとしての常識という考え方を鮮明にする方が、むしろ整合的だったのではないかと思う。

こういった点を踏まえて、再びバークリへと立ち返ろう。

4. バークリと常識再考

本論文の冒頭で、バークリの常識についての扱いについて少しではあるが言及した。古典的には、ルースのように、バークリを直接実在論として解釈することによってバークリ哲学が常識的であることを強調しようとする解釈があり、これは多くのバークリ研究者によって批判・検討されることとなった。既に述べたように、バークリの常識擁護は、リードの常識擁護に比べると、弱いもののように見える。バークリ自身の言葉とは裏腹に、リードのように、何か常識的な判断に大きな権威を置くもののように見えないのも確かである。バークリは、直接知覚の対象が実在物であるということを擁護していると述べているが、彼の言う実在物は、常識的な実

在物としては多くの哲学者には受け取られなかったこともそのことを示している。

しかし、常識哲学というものをどのようなものとして捉えるのかということによるだろうが、上述したような点によってバークリが、本当は常識に敬意を払っているのではないと言うことには少なくともならないように思われる。バークリは、彼自身の言葉が示すように、常識と当時の科学・哲学の理論を調停しようとしている。この点において、バークリが常識に敬意を払っているということを認められるのではないかと思う。この点を次のように言い直してもいいかもしれない。バークリは、「自覚的に」、常識の重要性を認め、それと科学を調停しようとした、と。この自覚的という点が私には重要であると思われる。常識を、比較的固定的なものとして取り扱うことが必ずしも常識への敬意の払い方ではないかもしれない。というのも、先ほど引用したジェイムズの言葉にある程度の説得力を認めるならば、常識とは固定的なものではそもそもなく、それ自体、さまざまに生き残ってきた新しい考えを取り込み、変化しつつも、安定した信念の体系をなしているものとして捉えることができるからである。そしてもしも常識というものがそういったものであるならば、新しい考えを、それまでの常識的な考えと調停させ、新しい信念の網目を作ろうとすること、それこそが、常識へのより大きな敬意の表れとして捉えることができるかもしれない。

科学と常識というものの、確かに一種の緊張関係にあると言えるだろうが、科学的な考えが、われわれの常識的な世界

像に取り込まれていくことは珍しいことではない。地球が太陽の周りを回っているという考えは、われわれの感覚がそのように教えないとしても、やはり常識的なものである。パークリの試みは、そのような常識を発展させる試みであったと捉えることもできるだろう。もちろん、パークリの試みが成功したのかどうかは、別の問題である。

【註】

- (1) Timothy Sprigge, "Philosophy and Common Sense," *Revue Internationale de Philosophie*, Vol. 40, No. 158 (3), p. 195.
- (2) リードが、判明ではない知覚というものを取り上げる箇所もある。しかし、リード哲学の中で判明ではない知覚というものが、知覚の定義によって可能かどうかという点とも考察に値する。
- (3) この議論については、リシュエの論文 (Rysiew, 2014) を参照されたい。
- (4) リシュエは、「われわれが判明に知覚する」という言葉は、たんに外的な諸物体が存在するというための関係性を表す言葉として用いられているだけだと言うが、もしも物体が実在するということを述べただけであるならば、そもそも「知覚する」という言葉は必要ないかもしれない。たんにわれわれが存在すると一般に信じているさまざまな物体が——われわれの肉体も含めて——存在すると言えはいいのではないだろうか。また、リードが知覚の直接性を観念説者に対して強調していることは、リードの五番目の第一原理がたんなる存在論的なものではないという読み方

を自然なものとするように思われる。

- (5) 「でしかない」という言い方は、あまり適切なものとは言えないかもしれない。安定しているという点では、常識は肯定的に捉えられているとも言えるからである。

参考文献

- Berkeley, George, 1949, *Three Dialogues between Hyllas and Philonous*, in *The Works of George Berkeley Bishop of Cloyne*, A. A. Luce and T. E. Jessop (eds.), Thomas Nelson and Sons. (論文中央43頁(教)で用箇所を参照)
- James, William, 2019, William James. *Pragmatism, Meaning of Truth and The Varieties of Religious Experience*, AJBT Classics.
- Leiter, Keith, 1990, "Chisholm, Reid and the Problem of the Epistemic Surd," *Philosophical Studies*, 60, pp. 39-45.
- Leiter, Keith, 1998, "Reid, Hume and Common Sense," *Reid Studies*, vol. 2, No. 1, pp. 15-25.
- Luce, A. A., 1968, "Berkeley's Existence in Mind," in Martin, C. D. and Armstrong, D. M. (eds.), *Locke and Berkeley: A Collection of Critical Essays*, pp.
- Popper, Karl, 1963, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*.
- Popper, Karl, 1972, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, The Clarendon Press.
- Redekop, Benjamin W., 1999, "Common Sense and Science: Reid Then and Now," *Reid Studies*, Vol. 3, No. 1, pp. 31-47.
- Reid, Thomas, 2002, *Essays on the Intellectual Powers of Man*, Derek R. Brookes (ed.), Pennsylvania, Pennsylvania State University

Press. (論文中では(EIP 頁数)で引用個所を示す。)

Rysiew, Patrick, 2014, "Reid's First Principle #7," *Canadian Journal of Philosophy*, Vol. 41, No. 51, pp. 167-182.

Sprigge, Timothy, "Philosophy and Common Sense," *Revue Internationale de Philosophie*, Vol. 40, No. 158 (3), p. 195.